

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20730478

研究課題名（和文）乳幼児期における援助行動および分配行動の発達メカニズムに関する研究

研究課題名（英文）Research on the developmental mechanisms of helping and sharing behaviors in early childhood

研究代表者

久崎 孝浩（Takahiro Hisazaki）

九州ルーテル学院大学・人文学部・講師

研究者番号：70412757

研究成果の概要（和文）：他者の好みに適切に応答する子どもの母親はそうでない子どもの母親に比してやりとりの中で子どもに対する模倣や感情コメントが多く、親の模倣や感情コメントは子どもの心の理解を促す可能性が示唆された。また、日本では母親が愛着恐れ型であるほどその子どもの心の理解の発達は遅れるのに対して、スリランカでは反対に子どもの心の理解の発達が早まることが明らかになり、子どもの心の理解の発達に及ぼす文化的養育背景の違いが問われた。

研究成果の概要（英文）：A mother whose child could respond properly to another individual's preference showed more imitative actions of him/her and utterances on his/her affective states during interaction with him/her than that whose child could not. These results suggested that parental imitative actions and utterances on child's mental states might facilitate the development of understanding others' minds. While in Japan a child whose mother was more tend to be disorganized type of attachment was slower in the development of understanding others' minds, in Sri Lanka vice versa. It is necessary to elucidate what cultural properties in care-giving give rise to such a difference between Japan and Sri Lanka.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000 円	360,000 円	1,560,000 円
2009 年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000 円	540,000 円	2,340,000 円

研究分野：発達心理学・感情心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：乳幼児，他者意図・情動理解，自己意識

### 1. 研究開始当初の背景

他者への思いやりは人格形成の基盤であり、それが乳幼児期からいかに発達するかを明らかにすることは養育・保育・教育において重

要である。特に、他者の失敗に対して援助したり、他者の要求に対して自分の所有物を分配することは、安定した互惠性にもつながる。こうした、他者への援助行動や分配行動は、

他者が単一の意図・欲求を有していること、またそうした意図・欲求が他者の立場で異なることがあるということの理解が必要であり、特に生後2年目に現出すると考えられる援助行動や分配行動を対象とした研究の多くは、そうした理解の発達を検討してきた (Hisazaki, 2007; Repacholi & Gopnik, 1997; Warneken & Tomasello, 2006, 2007)。しかしながら、他者への援助行動や分配行動の生起においては、単に他者の意図や欲求を理解していることだけではなく、自己自身の意図・欲求・感情を適切に抑制することも重要であり、感情調整の問題が不可分に絡んでくるはずである。

特に、援助行動や分配行動を個性的発達という観点でみた場合、他者の意図・欲求が自己自身とは異なるという認知的理解の個人差だけでなく、自己自身の意図・欲求・感情をいかに適切に調整しようかという感情調整の個人差によって、援助行動や分配行動の発現しやすさは個々に異なってくるものと思われる。研究対象年齢や概念の取り扱いは異なるものの、近年の研究においても、こうした着眼点のもと検討が進んでいる。例えば、おそらく感情調整が精妙と考えられる、愛着の安定した子どもは心の理論課題の成績の良さに関連したり予測したりし (Fonagy et al., 1997; Meins et al., 1998)、養育者との安定した愛着経験は他者の主観的な心の理解を促す可能性が期待される。おそらく、その発達のメカニズムとして、安定した愛着関係の中で、養育者が子どもの心的状態を随伴的かつ敏感に読み取って子どもの心的状態を映し出すことで子どもの心的状態が適宜調整されたり (Fonagy et al., 2002)、共同注意を基盤とした相互作用が展開されて、自他の心的表象の相違を子どもに気づかせていたりする (Meins, 1997) ということが考えられる。

こうした近年の研究動向に鑑みても、他者への援助行動や分配行動の発現しやすさの背後に、自己自身の意図や欲求が満たされないときに生じる不快感情が主たる養育者との間でいかに制御・調整されてきたかという経験が大きく絡む可能性があると思われる。また、援助行動や分配行動の認知的基盤として他者の心的状態を表象しようとする二次的表象能力もその発達に関与していると思われる。

## 2. 研究の目的

上記のような研究背景のもとに、次のような目的を設定した。

(1) 援助行動の発達: 生後13~30ヶ月の子どもを対象として、次の条件を設定して子どもの反応を観察した。①感情抑制条件: 実験者1と子どもは箱の上でそれぞれのカップと

スプーンを持って遊ぶが、実験者1は誤って箱の穴にスプーンを落としてしまう。②感情抑制・障壁条件: 実験者1と子どもとの間に障壁を設けて実験者1から子どもの様子が見えない状況を作り、②条件と同じ手続きで実験者1は失敗する。③手段相違条件: まず、実験者2が箱を子どもに見せ、子どもにその箱の蓋を開けさせて中から玩具を取らせる。続いて、実験者2が退室した後実験者1が入室し、カップとスプーンを箱に置こうとするが、誤って箱の穴にスプーンを落としてしまう。実験者1は穴の中に手を入れようとするが取ることができない。

(2) 分配行動の発達: 生後13~30ヶ月の子どもを対象として、次の条件を設定して子どもの反応を観察した。①好み一致条件: (a)子どもに2種類のオモチャのどちらかを選好させ、(b)実験者1も子どもが好んだオモチャに喜び、もう一方のオモチャに嫌悪や恐れを示し、その後(c)実験者1は2種類のオモチャを戻して「どっちかちょうだい」と要求する。②好み一致・障壁条件: 上記(a)~(c)まで基本的に好み一致条件と同じであるが、(c)において実験者1が要求するとき、衝立を設置して実験者1側から子ども側にあるオモチャが見えないようにする。③好み不一致条件: (a)と(c)は好み一致条件と同じで、(b)において子どもが好んだオモチャに嫌悪や恐れ、もう一方のオモチャに喜びを示す。④好み不一致・交代条件: (a)は好み一致条件と、(b)は好み不一致条件と同じで、(c)において実験者1と交代して実験者2がオモチャを要求する。

(3) 親子の感情制御や客体的自己理解の発達の影響: 子どもの欲求や不快情動の制御に関わる親子のやりとりのパターン、また客体的自己理解の発達が援助・分配行動にどのように影響するかを明らかにする。具体的に、親子の感情制御の測定として、子どもの欲求・意図が満たされない(怒りや悲しみといった不快情動の喚起が想定される)場面として玩具片付け場面や欲求遅延場面を観察して親子のやりとりパターンを特定する。また、客体的自己理解の測定では、伝統的な鏡・顔認知課題 (Lewis & Brooks-Gunn, 1979)、鏡・足認知課題 (Nielsen, 2006) や手押し車課題 (Moore et al., 2007) を実施する。

## 3. 研究の方法

上記のような研究目的および計画を設定し、援助・分配行動の実験観察と親子の感情制御と客体的自己理解の実験観察のために、観察対象者である子どものその保護者に2回調査に参加していただく予定であった。しかし、2回目の参加希望を得ることが難しく、1回の

調査の中で研究を実行していくことになった。そこで検討内容を、①分配行動の発達の変化を検討すること、②分配行動の個人差に対する親の子へのかかわり方の影響を明らかにすること、に若干変更して、以下のような研究方法を実施した。以下の(1)は、主に、他者の好みに影響を受けて子どもの好み・感情が変化して応答しているのか(好み不一致・交代条件)、また、子どもが自己自身の感情を抑制して応答しているのか(好み一致・障壁条件)を検討するために実施した調査である。また、以下の(2)は、主に、分配行動の個人差に対する親のかかわり方の影響を検討するために実施した調査である。

(1) 生後 13~30 ヶ月の子どもとその保護者 40 組が調査に参加し、学内施設の個室内で親子の心身に負担にならないための予防と対応に配慮して調査を行った。分配行動の観察場面は、「研究の目的」の(2)で述べたように、①好み一致条件、②好み一致・障壁条件、③好み不一致条件、④好み不一致・交代条件であり、それらの条件での子どもの反応・行動を観察した。

(2) 上記参加者に対しさらに 4 条件に加えて、①喜び・一致条件、②喜び・不一致条件、③嫌悪・一致条件、④嫌悪・不一致条件での子どもの応答・行動も観察した。①喜び・一致条件は、(a)子どもに 2 種類のオモチャを愛好させ、(b)実験者が子どもの好んだオモチャに喜びを示し、子どもが好まない側のオモチャには何の感情も示さず、(c)その後実験者が 2 種類のオモチャを戻して「どっちかちょうだい」と要求する、というものである。②喜び・不一致条件は、①喜び・一致条件の(b)の実験者の喜びの感情表出の対象が子どもが好まない側のオモチャであること以外、喜び・一致条件と同じである。③嫌悪・一致条件は、①喜び・一致条件の(b)において実験者が子どもの好まない側のオモチャに嫌悪を示し、子どもの好んだオモチャには何の感情も示さないということ以外は、喜び・一致条件と同じである。④嫌悪・不一致条件は、①喜び・一致条件の(b)において実験者が子どもの好んだオモチャに嫌悪を示し、子どもの好まない側のオモチャに何の感情も示さないということ以外は、喜び・一致条件と同じである。

また、親の子へのかかわり方については、調査導入時の親子の自由遊び場面を観察・録画して、その場面での親の行動を Meins (2003) の Mind-mindedness の指標に基づいて評定した。

さらに、調査遂行の過程で、親の現行のかかわり方よりも親の一貫した特性が子どもの他者の主観的な心の理解に大きくかわる可

能性があると考えるに至り、また近年の研究動向として親の一貫した特性と子どもの心の理解との関連性に関する議論が盛んになっていることに鑑みて、親の愛着パターンと子どもの心の理解の発達との関連性をも検討した。また、親の特性と子どもの心の理解の発達との関連性について多くはアメリカやヨーロッパを中心に行われており、実際文化的にどのように異なるかは不明な点が多い。そこで、日本だけでなくスリランカでの調査も敢行した。以下の(3)にその研究方法を述べる。

(3) 日本およびスリランカの幼稚園や家庭において、生後 40~85 ヶ月の子どもとその保護者を調査参加者とした(日本の子ども:131名、生後 41~79 ヶ月、スリランカの子ども:80名、生後 40~85 ヶ月)。スリランカでの調査においては、調査目的を十分に伝えたスリランカ留学生が中心的に調査を実施した。

子どもの心の理解の発達を測定するために、Wellman & Liu (2004) の連続的な心の理論課題を参考にして構成した課題群を実施した。その各課題は、次のとおりである。①欲求理解:ニンジンとクッキーを使い、子どもにどちらが好きか尋ね、人形はそれと反対の方を好きだと知らせ、登場人物はどちらを食べたいと思うか尋ねる。②信念理解:テーブルとイスを使い、子どもに猫がテーブルかイスのどちらに隠れているか推測させ、人形はそれと反対の方に猫が隠れていると思っていることを伝え、登場人物が猫を見つけるためにどこを探るか尋ねる。③知識理解:箱を使い、箱の中に犬が入っていることを子どもに見せ、それを見ていない人形は箱の中身を知っているかを尋ねる。④誤信念理解:クッキーの缶を使い、クッキーの箱の中にウサギが入っていることを子どもに見せ、それを見ていなかった登場人物が箱に何が入っているのかを尋ねる。⑤偽の感情の理解:友達に意地悪された登場人物の人形が自分の本当の気持ちを知られると弱虫と言われてしまうので、本当の気持ちを隠そうとして心と表情を変えていることを子どもに話し、3枚の感情カードを使って、登場人物がどのような表情をしているかを尋ねる。

母親に対しては母親自身の愛着パターンを測定するための尺度として ECR-GO 日本語版(中尾・加藤, 2004) および RQ-GO 日本語版(中尾・加藤, 2004)を使用した。また、スリランカ調査では、日本語に精通したスリランカ留学生にシンハラ語訳を依頼して質問紙を作成した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 分配行動の発達

研究の方法(1)の①好み一致条件, ②好み一致・障壁条件, ③好み不一致条件, ④好み不一致・交代条件で, 子どもが自分自身の好まないおもちゃを渡した人数を月齢群(低群: 12~14ヶ月, 中群: 16~19ヶ月, 高群: 22~26ヶ月)で検討したところ, 特に有意な結果を得なかった(図1参照)。

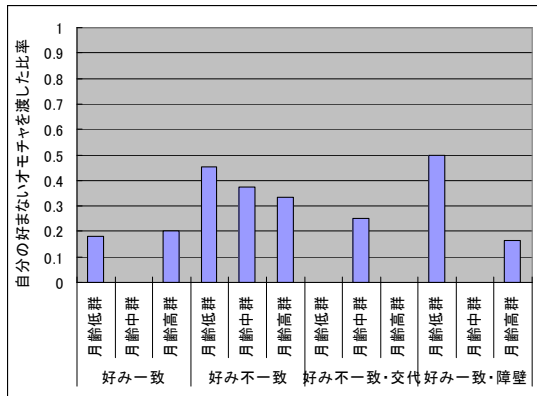


図1 好み不一致・交代条件や好み一致・障壁条件での応答の比率

またこの検討で, 他者の好みに影響を受けて子どもの好み・感情が変化して分配しているのか, また, 子どもが自己自身の感情を抑制して分配しているのかを明らかにすることはできなかった。参加した子どもが40名であり, また4条件すべてに参加した観察可能な反応をみるることができたわけではないため, より多くの参加者を募らなければ, それは明らかにならないだろう。

(2) 各条件での分配行動と親のかかわり方の関連性

喜び・一致条件では分配行動と親のかかわり方との有意な関連は認められなかった。しかし喜び・不一致条件では, 他者の好むおもちゃを渡す子どもの母親よりも他者の好まないおもちゃを渡す子どもの母親のほうが, 心的コメントの頻度や持続時間が多かった(月齢を統制したMANOVA, 頻度:  $F=8.54, p<.01$ , 持続時間:  $F=7.40, p<.05$ )。また, 嫌悪・一致条件では, 他者の好まないおもちゃを渡す子どもの母親よりも他者の好むおもちゃを渡す子どもの母親のほうが, 模倣の持続時間が多かった( $F=6.20, p<.05$ )。さらに, 嫌悪・不一致条件では, 他者の好まないおもちゃを渡す子どもの母親よりも他者の好むおもちゃを渡す子どもの母親のほうが, 感情コメントの持続時間が多かった( $F=4.35, p<.05$ )。他者の好むおもちゃを渡す子どもは他者の好まないおもちゃを渡す子どもよりも他者の主観的な意図・欲求を理解しているのだとすれば, こうした結果は, 母親の模倣や感情コメントは他者の主観的な意図・欲求の理解を促し, 適切な分配行動を促す可能性を示唆した。また, 心的コメントについては, 子どもが他

者の主観的な心的状態の理解が難しいからこそ, 母親は子どもに多く心的コメントを発する可能性が示唆された。

また, 好み一致・障壁条件や好み不一致・交代条件での子どもの応答と親のかかわり方との関連を検討したところ, 好み一致・障壁条件で, 自分も他者も好まないおもちゃを渡す子どもの母親よりも自分も他者も好むおもちゃを渡す子どもの母親のほうが子どもに対する親の感情コメントが有意に多かった(月齢を統制したMANOVA,  $F=5.87, p<.05$ )。子どもの適切な他者への分配行動を促すものとして, 子どもの感情に対する親の注意・コメントが重要であり, それは他者の主観的な欲求の理解を高める可能性が示唆された。

(3) 日本およびスリランカの心の理論発達

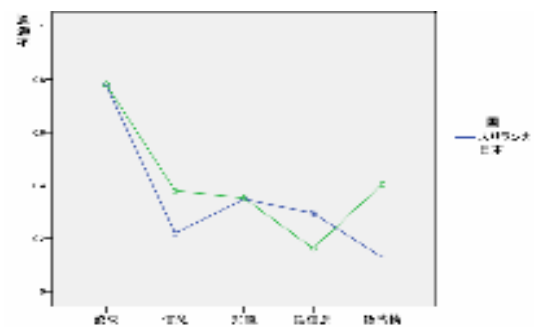


図2 4歳児の心の理論発達 (日本とスリランカ)

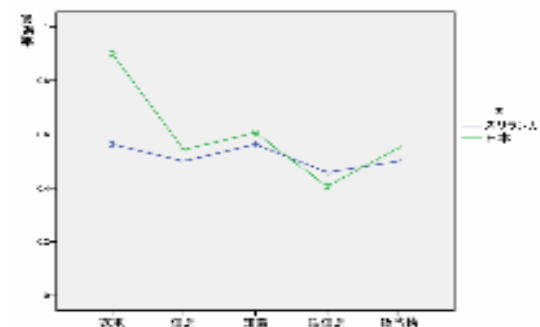


図3 5歳児の心の理論発達 (日本とスリランカ)

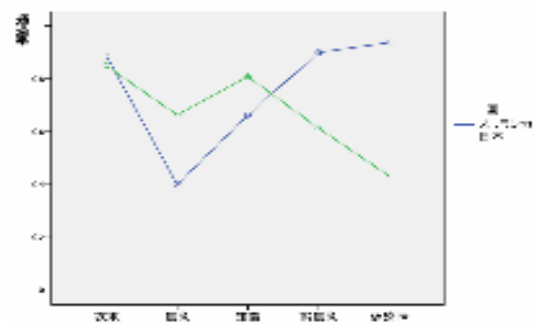


図4 6歳児の心の理論発達 (日本とスリランカ)

通過率を従属変数として国(2)×年齢(3)×性別(2)×課題(5)の4要因分散分析を行ったところ, 課題の主効果( $F=15.74, p<.01$ ), 年齢の主効果( $F=15.00, p<.01$ ), 課題×年齢の

交互作用 ( $F=2.21, p<.05$ ), 課題×国の交互作用 ( $F=3.17, p<.05$ ), 課題×年齢×国の交互作用 ( $F=3.02, p<.01$ ) が有意であった。図 2, 3, 4 をみると, 4 歳や 6 歳において信念課題は日本よりスリランカの子どもで難しいようであるが, 反対に偽感情課題はスリランカより日本の子どもで難しいようであり, 国によってそうした違いがあることが分かった。

以上のように, 日本とスリランカでは心の理論発達のパターンが幾分異なっていることがうかがえた。特に, スリランカの子どもは日本の子どもに比べて, 自分自身の信念や思い, または感性を貫こうとし, 一方で他者の視点に立って感情やその表出を理解する傾向があり, より自他の分化が進んでいるように思われる。こうした違いがどのような文化的養育の違いによるのか, 今後検討していく必要があるだろう。

#### (4) 日本およびスリランカにおける親の愛着パターンと心の理論発達との関連

心の理論発達と親の愛着パターンとの関連について国ごとに, 5つの心の理論課題の合計パス数と親の親密性回避および見捨てられ不安の相関係数(月齢を統制), 心の理論課題合計パス数と親の各愛着タイプ得点の相関係数(月齢を統制), そして心の理論課題合計パス数を従属変数とする親の愛着タイプを1要因とする共分散分析(月齢を共変量)を検討した。

まず日本では, 親密性回避 ( $r=-.09, ns.$ ), 見捨てられ不安 ( $r=-.05, ns.$ ), 安定型 ( $r=.20, ns.$ ), 回避型 ( $r=-.19, ns.$ ), とらわれ型 ( $r=-.10, ns.$ ) は有意でなかったが, 恐れ型は有意であった ( $r=-.31, p<.05$ )。また, 共分散分析では愛着タイプの主効果は有意でなかった ( $F=2.41, ns.$ )。こうした結果から, 日本においては, 母親が愛着恐れ型であるほど, その子どもは心の理論発達が遅いことが示唆された。一方, スリランカでは, 親密性回避 ( $r=.19, ns.$ ), 見捨てられ不安 ( $r=-.08, ns.$ ), 安定型 ( $r=-.02, ns.$ ), 回避型 ( $r=-.24, ns.$ ) は有意ではなかったが, とらわれ型 ( $r=.26, p<.05$ ) と恐れ型 ( $r=.33, p<.05$ ) は有意であった。また, 共分散分析では愛着タイプの主効果は有意でなかった ( $F=.04, ns.$ )。こうした結果から, スリランカでは, 母親が愛着とらわれ型や恐れ型であるほど, その子どもは心の理論発達が早いことが示唆された。

先の心の理論発達のパターンに加えて, 母親の愛着パターンとの関連でも日本とスリランカの違いが現れた。日本においては母親の愛着が恐れ型であるほどその子どもの心の理論発達が遅れるという関係が見られ, おそらく恐れ型の傾向の強い母親は子どもとの関係において混乱気味で, 適宜子どもの心的状態を読み取ってフィードバックしたり心的コメ

ントを施したりすることが希少であり, そうした関わりの中で育つ子どもは自己自身ひいては他者の主観的な心的状態を理解することが困難になっていくのであろう。しかし一方で, スリランカでは, 母親の愛着がとらわれ型あるいは恐れ型であるほどその子どもの心の理論発達は早いという結果を得た。スリランカにおいては, 子どもはとらわれ型あるいは恐れ型の母親の予測不可能で非随伴的な行動を懸命に読み取ろうとし (Fonagy et al., 2002), 結果的に心の理論発達が早いのかかもしれない。しかし, それは子ども自身の心的状態をベースにしたシミュレーションによって他者の心を理解しているというよりも, 親の予測不能で非随伴的な行動を懸命に迫って構築した理論に基づく心の理解 (Fonagy et al., 2002) であって, 決して標準的な心の理解の発達を遂げているわけではないかもしれない。今回の調査において, 親の愛着パターンと子どもの心の理解との関連において日本とスリランカで違いが現れた理由が何かはまだ不明であり, そこにどのような文化的養育背景の違いがあるのかという問題を今後解いていく必要があるだろう。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- (1) 久崎孝浩, 自他の欲求の相違の理解と他者表象および自己認知の関連性—他者を能動的主体として表象している1歳児は他者の主観的な欲求を理解しているか?, 九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要, 査読なし, 8巻, 2009, 41-54

[学会発表] (計1件)

- (1) 久崎孝浩, 子どもの欲求理解に対する母親の関わりとの関連性, 日本赤ちゃん学会第9回学術集会, 2009年5月16日, 滋賀県立大学交流センター

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

久崎 孝浩 (HISAZAKI TAKAHIRO)  
九州ルーテル学院大学・人文学部・講師  
研究者番号: 70412757